

『今昔物語集』における副詞「イマダ」の性格について

青 木 毅

一 はじめに — 問題の所在 —

『今昔物語集』は、いわゆる“和漢混淆文”の先駆けと称される通り、和文脈と漢文脈とが混在した文体を形成している。すなわち、巻第二十以前は漢文訓読調が強く、巻第二十二以後は和文調が強い文体となっている。その理由は、周知のように、天竺・震旦部（巻第一―十）と本朝仏法部（巻第十一―二十）には漢文や日本漢文の出典文献が多く、本朝世俗部（巻第二十二―三十二）には仮名（交じり）文の出典文献が多いためであると考えられている。その結果として、いわゆる漢文訓読語は巻第二十以前に多く分布し、いわゆる和文語は巻第二十二以後に多く分布するところとなっている⁽¹⁾。

副詞「イマダ」は漢文訓読語に類別される用語であるが、これに對立する和文語は「マダ」である⁽²⁾。ところが、『今昔物語集』⁽³⁾において用いられているのは「イマダ」のみで、「マダ」は一例も用い

られていないと推定される（後述）。また、漢文訓読文において「未」字を「イマダ」と訓じる場合、「未ダ然ラズ」のように（否定表現）で応じるのが普通であるが、『今昔物語集』においては、「未」字を「イマダ」と訓じているものの、肯定表現で応じている例も少なからず見られる（後述）。

このように、『今昔物語集』における「イマダ」には純然たる漢文訓読語とは言いがたい点が認められることから、本稿ではこの語を取り上げ、その性格を検討する⁽⁵⁾。

二 「未（ダ）」の読み

『今昔物語集』において副詞「イマダ」を表記していると考えられる漢字は「未」字である。ほとんどの例が「未ダ」と表記されているが、捨て仮名を送らない「未」字のみの例も存している。これら「未（ダ）」がすべて「イマダ」と読まれたとすれば、「マダ」は

一例も用いられていないことになるが、「マダ」と読まれた可能性がないのかどうか検討しておきたい。その可能性を伺わせる事例としては、『今昔物語集』における「未ダ」と「宇治拾遺物語」における「まだ」とが同文の同話の同一箇所において対応している例を指摘することができる。

○忝モ守殿タニ未ダ年来名不召。

〔今昔物語集〕巻第二十四・第五十六

・かけまくもかしこき守殿だにも、まだこそ、こ、らの年月比、
まだ、しか召さね。

〔宇治拾遺物語〕九三

○鯉ハタラ未ダ不出来ス。(『今昔物語集』巻第二十八・第三十)

・鯉はまだいでこず。

〔宇治拾遺物語〕一三三

(他に、「また」と対応しているかとも考え得る存疑例が、「宇治拾遺物語」に一例存している。後述)

ただし、『今昔物語集』で漢文訓読語が用いられている箇所において「宇治拾遺物語」で和文語が対応しているという事例は、少なからず認めることができる。したがって、『今昔物語集』における漢文訓読語の「イマダ」と「宇治拾遺物語」における和文語の「マダ」とが対応している例が存しているとしても、必ずしも不思議ではない。

平安時代の古辞書によれば、「未」字に「イマダ」訓は存しているが、「マダ」訓は認めがたいようである。三卷本(前田本)『色葉

字類抄』には、「イマダ」を表記する漢字として「未」字のみが掲出されており、「未」字と「イマダ」訓とが緊密に結びついていたことが伺われる。「マダ」は項目(見出し)自体が見出だされない。観智院本『類聚名義抄』には、「未」字に「イマダ」訓は掲載されているが「マダ」訓は掲載されていない。また、正宗敦夫編の仮名索引(『類聚名義抄第二巻』風間書房)によれば、「マダ」訓を有する漢字自体が掲出されていない。

訓点資料において「未」字に「マダ」訓が付された確実な例は未見であるが、存疑例としては、高野山西南院蔵『和泉往来』に次のような例が存する。

・未三罷^{マダ}胡馬^{ウマ}壞土^{ハク}之歎^{ノナガシ}。(162)

『和泉往来』の訓点は、『高山寺本』に「くらべて口頭語的性格が強い」とされており、その意味では、和文語の「マダ」が訓点に用いられた可能性も皆無とは言えないのかもしれない。しかしながら、『和泉往来』における他の副詞用法の「未」字は、いずれも「舟檝未乾」(9)のように「イマダ」と読まれていることから、右掲の例も「(イマダ)と読まれたものと考えられる。このことは、本資料において、「何」(14)のように単語の第一音節を表記しない付訓例が認められることから、裏付けることができよう。

以上のことから、平安時代においては、基本的に、「未」字は「イマダ」と読まれ、「マダ」と読まれることはなかったものと推定さ

れる。したがって、「今昔物語集」における「未(ダ)」は「イマダ」を表記したものと見るべきであり、同集には「マダ」は用いられていなかったと考えられる。「今昔物語集」において、「マダ」のように一定の漢字表記と結びついていない語が用いられる場合は、仮名書き大書されるのが普通である¹⁰⁾。

三 巻別分布状況

「イマダ」はいわゆる漢文訓読語に類別される用語である。「今昔物語集」における漢文訓読語は、一般的に、天竺・震旦部(巻一)

十)、本朝仏法部(巻十一―二十)、本朝世俗部(巻二十二―三十)の順で多く分布する傾向にあり、特に本朝の仏法部と世俗部の間に、使用度数の上での断層(顕著な差)が認められるとされる。その理由は、出典文献として、天竺・震旦部では漢文が、本朝仏法部では日本漢文が、本朝世俗部では仮名(交じり)文が、それぞれ多くを占めているためであると考えられている¹¹⁾。

①のようになる。「今昔物語集」における「イマダ」の用例数を巻別に示せば、表

(表①)

Bの割合(%)	否定表現(B)	肯定表現(A)	未(ダ)	用法	
				巻	
91.7	11	1	12	1	1
100	11		11	2	2
88.9	16	2	18	3	3
83.3	10	2	12	4	4
94.1	16	1	17	5	5
91.7	22	2	24	6	6
91.7	11	1	12	7	7
				8	8
89.3	25	3	28	9	9
58.8	10	7	17	10	10
90.0	9	1	10	11	11
80.0	4	1	5	12	12
83.3	5	1	6	13	13
76.9	10	3	13	14	14
72.7	8	3	11	15	15
77.8	7	2	9	16	16
90.0	9	1	10	17	17
				18	18
54.5	6	5	11	19	19
81.8	9	2	11	20	20
				21	21
50.0	1	1	2	22	22
50.0	2	2	4	23	23
57.1	8	6	14	24	24
92.3	12	1	13	25	25
84.6	11	2	13	26	26
25.0	1	3	4	27	27
53.3	8	7	15	28	28
42.9	3	4	7	29	29
50.0	1	1	2	30	30
85.7	6	1	7	31	31

(注)「今昔物語集」には「未(ダ)朝(ツトメテ)」という表現が四例見出されるが、次のように、格助詞「ノ」に続いた例や格助詞「ヨリ」が付いている例が見られることから、全体として体言的な性質を有していると判断される。したがって、副詞用法の「イマダ」とは認められず、表①からは除外した。

- 寅ノ日ノ未(ダ)朝、(巻第二十八・第四)
- 未(ダ)朝ヨリ未ノ時許マデ、(巻第二十八・第五)
- 其ノ日ノ未(ダ)朝メテ、(巻第二十八・第七)
- 夜明テ未(ダ)朝、(巻第二十八・第十八)

表①によれば、天竺・震旦部に一五一例、本朝仏法部に八六例、本朝世俗部に八一例用いられており、天竺・震旦部における用例数が目立って多くなっている。すなわち、用例数に顕著な差が見られるのは、天竺・震旦部と本朝仏法部との間であり、右に述べた、『今昔物語集』における漢文訓読語の分布についての一般的傾向とは、必ずしも一致していないことになる。

「イマダ」が漢文訓読文で用いられる場合は、〈否定表現〉を伴って用いられるのが普通である。とすれば、漢文訓読調の度合いをはかる上では、〈否定表現〉を伴う用法に注目する必要がある。そこで、表①において〈否定表現〉を伴う割合を見ると、天竺・震旦部が八七・四％（一五一例中一三三例）、本朝仏法部が七七・九％（八六例中六七例）、本朝世俗部が六五・四％（八一例中五三例）となっている。この〈否定表現〉を伴う割合においては、天竺・震旦部、本朝仏法部、同世俗部の順で高くなっているが、本朝の仏法部と世俗部との間に極端な開きは認められず、やはり漢文訓読語の一般的な傾向と一致しているとは言いがたい。

このような表①に見られる「イマダ」の分布については、「イマダ」が用いられるべき文脈の現れ方に左右された結果と見る余地もあるが、ひとまず使用の実態を整理すれば、次のようになる。まず、天竺・震旦部と本朝仏法部とを比較すると、〈肯定表現〉での用例数はどちらも一九例であるが、〈否定表現〉については、天竺・

震旦部では一三二例であるのに対して、本朝仏法部では六七例であり、その差は約二倍もある。すなわち、天竺・震旦部と本朝仏法部との間に見られる差異は、漢文訓読文に特徴的な用法である〈否定表現〉における用例数の差に起因していると言える。次に、本朝仏法部と本朝世俗部とを比較すると、「イマダ」の用例数に大差はないが（仏法部八六例・世俗部八一例）、〈否定表現〉と〈肯定表現〉との用例数の差にやや開きがある。すなわち、〈否定〉と〈肯定〉との差は、本朝仏法部では三倍以上（〈否定〉六七例・〈肯定〉一九例）であるのに対して、本朝世俗部では二倍もない（〈否定〉五三例・〈肯定〉二八例）。これは、本朝世俗部においては、漢文訓読文では原則として見られない〈肯定表現〉における用例の使用率が相対的に高いことを示している。

このように、『今昔物語集』においては、漢文訓読の用法（〈否定表現〉中の用法）のみならず、漢文訓読的とは言えない用法（〈肯定表現〉中の用法）も少なからず認められるわけであるが、このような用法をもつ「イマダ」の性格をどのように捉えればよいのだろうか。

次に古典文献との比較を行うことにより、『今昔物語集』における「イマダ」の文体的性格について検討する。

四 出典文献との比較

『今昔物語集』における「イマダ」が、出典文献（同文的同話を含む）⁽¹²⁾の当該箇所においてどのような表現と対応しているかを分類すれば、次のようになる。

〈否定表現〉

(a) 「イマダ〔未〕」と対応している

① 未_レダ一宿ニ不_レ至_レザルニ、神、既ニ此ノ事ヲ語テ、

〔今昔物語集〕巻第六、第二十

・未_レ至一宿。神已預知。

〔三宝感應要略録〕巻上・第十六

② 此ニノ人未_レダ因果ヲ不悟。

〔今昔物語集〕巻第十一・第一

・此兩人ハイマダ因果ヲシラザル也。

〔観智院本〕『三宝絵』中・一

③ 暑預粥ニ未_レ不_レ飽ト被仰レバ、

〔今昔物語集〕巻第二十六・第十七

・「芋粥に^{まだ}飽かず」と仰らるれば、

〔宇治拾遺物語〕上・一八

(b) 「マダ」と対応している

④ 鯉ハタラ未_レダ不出来ス。〔今昔物語集〕巻第二十八・第三十

・鯉はまだいでこず。

〔宇治拾遺物語〕二三

(c) 「イマダ」「マダ」とは別の表現と対応している

⑤ 我等未_レダ仏ノ在マス所ヲ不知リツ。

〔今昔物語集〕巻第二・第二

・我等頃來不知大師所在。

〔釈迦譜〕巻二・十六

⑥ 君、未_レダ官位ニ遇フ事無シ。

〔今昔物語集〕巻第九・第十六

・竟不能進^行君官位^返。

〔前田本〕『冥報記』巻中・第七

⑦ 法相大乘宗ノ法、未_レダ不絶スシテ盛リ也

〔今昔物語集〕巻第六・第六

・其ヨリホウサウノ大ソウノ法門于今絶ス。

〔打聞集〕第九

(d) 対応する表現が存しない（▲印は、「未ダ」に対応する表現が

存すべき箇所を示す）

⑧ 国府ニ着テ後、未_レダ神事ヲモ不拜ス、

〔今昔物語集〕巻第十四・第六

・着府已後。▲不勤神拜。

〔法華験記〕巻下・第百廿六

⑨ 仏ト云フラム者ヲ未_レダ不知ス。

〔今昔物語集〕巻第六・第一

・佛ト云物▲不知。

〔打聞集〕第二

(e) 対応する文脈が存しない（●印は、「未ダ」を含む文脈が存す

べき箇所を示す)

⑩ノ隔有り。其レヲ未ダ不見セズ。築垣固ク築キ廻セリ。

〔今昔物語集〕卷第五・第二)

・こ、にひとつのへだてであり。●築地を高くつきめぐらしたり。

〔宇治拾遺物語〕上・九二)

〈肯定表現〉

(a) 「イマダ(未)」と対応している

⑪法慶死セリ。未命有りヤ

〔今昔物語集〕卷第六・第十二)

・法慶合死未。

〔三宝感應要略録〕卷上・第五)

⑫未ダ弱冠也ケル時、俄ニ病ヲ受テ死ケリ。

〔今昔物語集〕卷第七・第四十七)

・年未弱冠(逸時)暴病死。

(前田本「冥報記」卷中・第十二)

⑬未ダ習ヒ薄キ人也。速ニ堂ノ外ニ出ヨ

〔今昔物語集〕卷第四・第二)

・未薄習者早出堂内

(金剛寺本「注好選」中・四十一)

⑭和織ニ刀ハ未ダ持タリ。(今昔物語集)卷第二十三・第二十)

・逆手に抜きたりける刀は、いまだ持たり。

〔宇治拾遺物語〕下・一七六)

(b) 「マダ」と対応している

⑮未ダ食ヒ残シタルモ鍋ニ有リ。

〔今昔物語集〕卷第十六・第四)

・又食ひ残して鍋にあるも見苦し

〔古本説話集〕下・五三)

(c) 「イマダ」「マダ」とは別の表現と対応している

⑯年八十余ニシテ老耄シ乍ラ未ダ生テ有ケリ。

〔今昔物語集〕卷第十四・第六)

・年過八十。老耄猶存。

〔法華験記〕卷下・第百廿六)

⑰汝ガ父母未ダ彼ノ所ニ有リ。

〔今昔物語集〕卷第十四・第十二)

・汝父母皆今在彼國。

〔法華験記〕卷上・第三十一)

(d) 対応する表現が存しない(▲印は、「未ダ」に対応する表現が存すべき箇所を示す)

⑱我が妻、未ダ年若クシテ、病ヒ、患ヘ無シ

〔今昔物語集〕卷第九・第三十一)

・吾婦▲年少、无疾患也。

(前田本「冥報記」卷下・第二十五)

⑲其時ニ王、使ニ問テ宣ク、「彼山田ノ郡ノ女ノ体ハ未ダ有リヤ」

〔今昔物語集〕卷第二十・第十八)

ト。

け継いだものと推定される。ただし、その巻別分布が必ずしも典型的な漢文訓読語の状況と一致していないことから、〈否定表現〉中の用例すべてが漢文訓読文の用法であると断定するのは困難であろう。

「イマダ」は『万葉集』にも見られ、奈良時代からすでに用いられていた語であるが、その用法は〈否定表現〉中に限らず、〈肯定表現〉においても用いられていた。次に、〈肯定表現〉中の用例を例示しておく。

・我が背子が古き垣内の桜花 いまだ含めり（伊麻太敷布売利）
一目見に来ぬ

・月数めばいまだ冬なり（伊麻太冬奈里）しかすがに霞たなびく
春立ちぬとか

すなわち、「イマダ」は本来〈否定表現〉〈肯定表現〉に関わらず用いられる語であったと考えられる。そのような、いわば日本語本来の用法の「イマダ」が、『今昔物語集』における〈否定表現〉中の用例の中にも存している可能性は否定できない。〈否定表現〉中の「イマダ」の中に、『宇治拾遺物語』（の母体となった説話、すなわち『宇治大納言物語』）における「イマダ」を受け継いだと見られる例（先掲の用例③など）が存することから考えると、その可能性はむしろ高いと言えるのではないか。

ところで、『今昔物語集』における〈肯定表現〉中の「イマダ」に対して、漢文体の出典文献において、「未」字が対応している場

合がある（『三宝感应要略録』一例、『冥報記』三例、『注好選』一例。先掲の用例⑪⑫⑬参照）。一般に、漢文の「未」字は〈否定表現〉として訓読されるが、これらについては、どのように解釈すべきであろうか。

『三宝感应要略録』の例（⑪）は文末に用いられており、「イマダシヤ」と訓読されるべき例である。すなわち、へまだ死んでいないのか」という意味であり、文の趣旨としては『今昔物語集』の「未命有リヤ」と同一と見て良いと思われる。

『冥報記』の例（⑫）は、「未ダ弱冠ナラザリケル時」のように訓読されるべきところであるが、『今昔物語集』の撰者があえて改変して〈肯定表現〉として読んだかと思われる。誤読という可能性も考えられなくはないかもしれないが、それにしてはあまりにも初歩的にすぎないように思われる。『冥報記』の残りの二例（〈肯定表現〉中の例）が「年未弱冠」という同一文脈の例であることから見ても、単純な誤りとは考えがたく、意図的な読み替えと見るべきではないか。実際、『今昔物語集』における〈肯定表現〉中の「イマダ」には、へまだ年若い頃へに類する文脈で用いられた例が少なからず存している（二六例）。

○太子未ダ幼稚ニ御マス間ニテ、誰カ養ヒ奉ラムト大王思ヒ歎ク。

（巻第一・第二）

○未ダ稚キ時ニ父ノ賈誼死ヌ。

（巻第十・第二十四）

○未ダ若キ程ニテ、男触フレバフ事無クシテ禁中ニ有リ。

(卷第十・第二十六)

○菩薩未ダ幼キ少僧ニテ在マシケル時、河内ノ[]郡ニ法
会ヲ修スル事有ケリ。

(卷第十一・第二)

○其ノ大将未ダ童ニテ、勢長ノ時マデ、冠ヲモ不着スシテゾ御ケル。

(卷第十四・第四十二)

○此ノ大臣年未ダ若ク御ケル時ニ、他戸ノ宮ト申ス太子御ケリ。

(卷第二十二・第四)

○其[]ガ未ダ若カリケル程ニ、身ノ才極テ賢クシテ、世ニ並
無カリケレバ、

(卷第二十四・第十八)

○未ダ若カリケル時ニ、父ノ大臣失給ヒニケレバ、

(卷第二十四・第三十八)

○其レガ未ダ若クシテ、供奉ト云テ、西塔ニ有ケル時ニ、

(卷第二十八・第七)

○未ダ若クシテ東寺ノ入寺ニ成テ拜堂シケルニ、

(卷第二十八・第九)

このように、「今昔物語集」の撰者が好んで用いる類型的表現に、
あえて改変した可能性が高いように思われる。

『注好選』の例(⑬)については、原漢文の「習」字が文脈上
(女性好きの)習性・性分の意であり、したがって「未薄習者」
とはへまだ女性好きの性分の抜けない者」の意であると考えられ

る。「今昔物語集」ではへまだ学習の不十分な者」の意のごとく解
釈されていることから、撰者の誤訳と見なすことができよう。

『今昔物語集』の「イマダ」に対して、出典文献において「マダ」
が対応している場合が(否定表現へ肯定表現へ併せて四例見出さ
れる(「宇治拾遺物語」三例、「古本説話集」一例)。これらのうち、
次の「宇治拾遺物語」の例については、文脈上「また」である可能
性もあるように思われる(新日本古典文学大系の本文でもそのよう
に解釈されている)。

・よくわびしめて後に、置きたる算を、さら／＼とをしこぼちた
りければ、笑ひさめにけり。「いましばしあらましかば、死な
まし。またか斗たへがたき事こそなかりつれ」とぞいひあひけ
る。笑ひこうじて、集まりふして、病むやうにぞしける。

(下・一八五)

ただし、「今昔物語集」の対応箇所では、「未ダ此許難堪キ事コソ
無カリツレ」(卷第二十四・第二十二)となつてゐることから、少
なくとも『今昔物語集』の撰者は、へまだ」の意と解釈したと考え
られる。

右の例を含めた四例は、和文語の「マダ」を「今昔物語集」撰者
が漢文訓読語の「イマダ」に置き換えた場合である(「宇治拾遺物
語」の和文語と「今昔物語集」の漢文訓読語が対応している箇所が
少なからず認められることはすでに述べたところである)。このよ

うな例が存することと、『今昔物語集』において「マダ」が用いられていないと推定されることを合わせ考えると、『今昔物語集』撰者は、「マダ」よりも「イマダ」の方を意識的に選択して用いていると考えられる。

【今昔物語集】の「イマダ」に対して、出典文献において「イマダ」とも「マダ」とも異なる表現（別表現）が対応している場合が、〈否定表現〉五例〈肯定表現〉三例見出される（先掲の用例参照）。この場合において、〈肯定表現〉中の例が存していることには注目される（『法華験記』三例。先掲の用例⑩⑪以外の一例は⑩と同じ「猶（ナホ）」が対応している）。これらは、『今昔物語集』撰者が、出典文献に存する表現を改めてまで〈肯定表現〉中に「イマダ」を用いている例と見なすことができる。このことは、『今昔物語集』撰者が意識的に選択して用いている「イマダ」の中に、漢文訓読文の用法以外のものが含まれていることを示している。

（d）の「対応する表現が存しない」とは、出典文献において「イマダ」が存しない箇所に、『今昔物語集』撰者が「イマダ」を付け加えた場合である。出典文献が漢文体の場合は、〈否定表現〉八例〈肯定表現〉三例（『今昔物語集』撰者の用いた『三宝絵』が漢文であれば、〈肯定表現〉四例）となっており、〈否定表現〉中に付加される場合の方が多くなっている。一方、出典文献が仮名（交じり）文の場合は、〈否定表現〉〈肯定表現〉とも八例となっており、表②

による限り、両者に差は見られない。このことは、『今昔物語集』において、訓読調の強い説話では〈否定表現〉中に用いられる漢文訓読文の用法が現れやすく、訓読調の弱い説話では〈否定表現〉〈肯定表現〉に問わず用いられる日本語本来の用法が現れやすいことを示していると考えられよう（用例数が少ないため、偶然である可能性は排除できないが、少なくとも一つの考え方としては成り立つと思われる）。

（e）の「対応する文脈が存しない」とは、出典文献に存しない文脈を『今昔物語集』撰者が独自に文章化した箇所に、「イマダ」が用いられている場合である。出典文献が漢文体の場合は、〈否定表現〉中のみ「イマダ」が用いられており（八例）、〈肯定表現〉中の例は見られない（あくまで表②による限りのことであるが）。一方、出典文献が仮名（交じり）文の場合は、〈否定表現〉中の例が多いものの（八例）、〈肯定表現〉中にも用いられている（四例）。このことは、〈肯定表現〉中の例は、訓読調の強い説話よりも訓読調の弱い説話の方により現れやすいことを示していると言えよう（この場合も用例数が少ないという憾みはあるが、〈肯定表現〉中の「イマダ」が漢文訓読文では原則として用いられないことから考えると、上記のように考えるのが自然であろう）。

ここで、これまで（巻別分布状況・出典文献との比較）の検討結果をまとめると、次のようになろう。

『今昔物語集』においては、出典文献に存する「マダ」やそれ以外の表現（別表現）を「イマダ」に置き換えている例が見られることから、『今昔物語集』撰者は「イマダ」を意識的に選択して用いている場合があると考えられる。〈否定表現〉中の「イマダ」は、出典が漢文体の場合（すなわち訓読調の強い説話）に偏って現れていることから、基本的に漢文訓読文の用法を受け継いだものと推定される。ただし、必ずしも典型的な漢文訓読語の分布を示していないことから、〈否定表現〉中の「イマダ」の中にも漢文訓読文の用法以外のもの（〈否定〉〈肯定〉）に関わらず用いられる、日本語本来の用法）が含まれている可能性がある。一方、漢文出典の「未」字（否定表現）中の「イマダ」をあえて〈肯定表現〉に改変したと見られる例や、〈肯定表現〉の場合でも「マダ」や別表現を「イマダ」に置き換えている例が存している。少なくともこれら〈肯定表現〉中の「イマダ」は、漢文訓読語の用法ではなく、おそらくは日本語本来の用法を受け継いだものと考えられる。とすれば、『今昔物語集』における「イマダ」は、漢文訓読文の用法が中心となつてはいるものの、日本語本来の用法も少なからず含まれていると考えられる。

五 『今昔物語集』における「イマダ」の文章史の意味

すでに述べたように、『今昔物語集』においては、「マダ」は用い

られておらず（推定）、専ら「イマダ」が用いられている。前稿¹⁵において、平安時代の仮名文学作品における「マダ」「イマダ」の使用状況を概観したが、それによれば、「マダ」を用いず「イマダ」を専用している作品は、〈説話類〉の「打聞集」（二例）・「三宝絵（観智院本）」（三七例）、〈歴史物語〉の「水鏡」（二六例）であった。これらの三作品は、「イマダ」を専用しているという点で『今昔物語集』と共通していると言えよう。ただし、〈否定表現〉〈肯定表現〉の内訳は、『打聞集』が〈否定〉〇例〈肯定〉二例、『三宝絵（観智院本）』が〈否定〉三六例〈肯定〉一例、『水鏡』が〈否定〉一三例〈肯定〉一三例となっており、三者三様である。これらと『今昔物語集』とを比較した場合、どのようなことが言えるのだろうか。

『打聞集』においていわゆる漢文訓読語の「イマダ」が専用されているのは、漢文訓読文に起源を持つ片仮名交じり文で記されていることが大きな要因であろう。ただし、依拠資料として、和文体の散逸「宇治大納言物語」が想定されていることから、さほど漢文訓読調は強くなく、むしろ訓読の要素を含んだ和文体とも言うべき文体となつて¹⁶いる。その結果として、「イマダ」の用法は漢文訓読文の用法とはなっていない（二例とも〈肯定表現〉）ものと考えられる。

『今昔物語集』において、〈否定表現〉と〈肯定表現〉とが同数、または〈否定表現〉よりも〈肯定表現〉の方が多く用いられている

卷としては、卷第二十二（否定）一例（肯定）一例・二十三（否定）二例（肯定）二例・二十七（否定）一例（肯定）三例・二十九（否定）三例（肯定）四例・三十（否定）一例（肯定）一例が存する。これらの巻はいずれも本朝世俗部の巻であり、『今昔物語集』の中では和文調の強い巻となっている。これらの巻における「イマダ」は、〈否定表現〉に偏っていないという点で『打聞集』の「イマダ」と共通していると言える。

『三宝絵』は、『日本靈異記』をはじめとする仏書類が背景となつて成り立っている作品であり、調査に用いた観智院本は片仮名交じり文で記されている。そのため、『三宝絵（観智院本）』は極めて漢文訓読調の強い文体となっており、「イマダ」の用法が〈否定表現〉に偏っているのは、その漢文訓読調の強さを示していると考えられる。『今昔物語集』においても、漢文や日本漢文が出典の中心となっている天竺・震旦部や本朝仏法部のほとんどの巻では〈否定表現〉に偏っており、漢文訓読調の強さが現れていると言える（表①参照）。

『水鏡』は、漢文体（日本漢文）の『扶桑略記』に依拠して成り立っている作品であり、その結果として、漢文訓読調の「イマダ」が専用されていると考えられる。ただし、基本的に平仮名文で記されているため、漢文訓読調の度合いは『三宝絵（観智院本）』ほど強くない。「イマダ」の用法が〈否定表現〉に偏っていないのは、その反映であらう。

は、その反映であらう。

『今昔物語集』の天竺・震旦部や本朝仏法部（出典の大半が漢文または日本漢文）の中で著しく〈否定表現〉に偏っていない巻としては、卷第十（否定）一〇例（肯定）七例・十九（否定）六例（肯定）五例が存する。これらの巻には、漢文や日本漢文に直接依拠せずにその和訳本に基づいた説話が少なからず含まれているのではないかとの考え方があつた（ここで言う和訳本とは、たとえば『扶桑略記』を和訳した『水鏡』のような文体の文献を想定するこゝとができると思われる。ただし、表記が平仮名交じりであつた片仮名交じりであつたかについては、未詳と言わざるを得ない）。すなわち、卷第十・十九は天竺・震旦部や本朝仏法部の中では比較的ゆるやかな漢文訓読調を示しており、その結果として〈否定表現〉への著しい偏りが見られないものと考えられる。

以上のことから推察すれば、『今昔物語集』における「イマダ」には、基本的に〈否定表現〉において用いられる漢文訓読文由来のもの、〈否定表現〉に限らず〈肯定表現〉でも用いられる日本語本来的なものが混在していると見られる。前項までの検討においても同様の結果を得ており、結果の妥当性を裏付けていると言えよう。

六 おわりに

以上述べてきたように、『今昔物語集』においては由来を異にす

る二種類の「イマダ」の存在を指摘することができると思われる。ただし、このような見方に対しては、次のような疑問があるかもしれない。すなわち、「イマダ」の漢文訓読文の用法は、漢文訓読という場において〈否定〉の意を含む「未」字を訓読するという制約の中でいわば臨時的に生じた用法であるから、日本語本来の用法とあえて区別する必要はないのではないか、という疑問である。筆者は、この疑問に対して明確な解答を提示するための材料を十分用意し得ていないのであるが、現在のところ、次のように考えている。

漢文訓読文における「イマダ」が〈否定表現〉として用いられるのは、もちろん〈否定〉の意を含む「未」字を訓読するという制約の結果するところである。ただし、漢文における「未」字を直接訓読するという場を離れたところで、〈否定表現〉に偏って用いられる「イマダ」が認められるとすれば、「イマダ」は漢文訓読文の用法を新たに獲得したと見ることができると思われる。【今昔物語集】における「イマダ」は、漢文出典の影響を直接的・間接的に受けているとは言え、漢文訓読という場からは切り離されたところで用いられたものである。その「イマダ」の〈否定表現〉への偏り方が、説話の文体（訓読調の強さ）に応じて変化しているということは、【今昔物語集】の「イマダ」の中に日本語本来の用法とは区別すべき漢文訓読文の用法が認められるということの意味しているのではないだろうか。すなわち、「イマダ」という日本語が漢文訓読とい

う制約の中で繰り返し用いられているうちに、「イマダ：〈否定表現〉」という形式が、漢文訓読文を特徴づける一つの語法として成立したのではないかと考える次第である。

本稿では、右のような立場から、「今昔物語集」における「イマダ」を、由来を異にする二種類の用法の「混在」として捉えた。ただし、この二者は、言語形式上峻別できない形で用いられていることから、「今昔物語集」撰者自身が異なる用法の「混在」という意識で用いていたかどうかは未詳である。本稿における結果を、「今昔物語集」撰者の文体の問題としてどのように位置づけるべきかについては、改めて検討すべき課題である。

〔注〕

〔1〕「今昔物語集」内部における和文脈と漢文脈との混在・対立に関する研究については、佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』（一九八四年、明治書院）の第一章に詳しく述べられている。

〔2〕築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（一九六三年、東京大学出版会）

〔3〕本文は、新日本古典文学大系『今昔物語集（一）』（岩波書店）を用いた。

〔4〕小林芳規『漢文訓読史上の問題―再読字の成立について―』（『国語学』一六集、一九五四年三月）

〔5〕「今昔物語集」における「イマダ」については、宮田裕行『今昔物語集における再読字について』（『王朝文学』五号、一九六一年）の中で取り上げられ、その使用状況（分布状態・出典文献との関係）が報告されて

- いる。本稿とは、『今昔物語集』の本文（新訂増補国史大系本）や出典文献の認定が一致しておらず（現在では出典とは認められていない文献も含まれている）、整理のしかたも異なっているため、単純な比較はできないが、調査結果の概要はおおむね共通していると言える。ただし、宮田論文の趣旨は、再読字の用法を通じて、和漢両文体の混在の様相を記述するところにある（当時の『今昔物語集』文体研究の主流）、本稿の目的とするところは異なっている。また、同論文では、〈肯定表現〉で応じている例を再読字の結び（否定表現）が「流れ」たものと捉えており、漢文における「未」字の用法の問題として扱っている点など、本稿とは問題の設定のしかたが異なっている。そのような理由から、本稿において改めて、『今昔物語集』の「イマダ」を取り上げることとした次第である。
- (6) 本文は、新日本古典文学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』（岩波書店）を用いた。
- (7) 松城俊太郎『今昔物語集の「弥」をめぐって（一）』（二）』（『国語学』一三五・一三六集、一九八三年十二月・一九八四年三月）
- (8) 本文は、京都大学国語国文学資料叢書二十八（臨川書店）所収の影印本を用いた。
- (9) 小林芳規『和化漢文における口頭語資料の認定』（『鎌倉時代語研究』十二輯、一九八九年七月）
- (10) 山口佳紀『今昔物語集の形成と文体―仮名書自立語の意味するもの―』（『国語と国文学』四五巻八号、一九六八年八月）
- (11) 注（一）文献参照。
- (12) ここでは、仮名交じり文の出典文献の不足を補うために、同文の同話（『打聞集』『宇治拾遺物語』『古本説話集』）を含めた。これらは、共通の母体として散逸『宇治大納言物語』が想定されており、その文体を受け継いでいると考えられているため、出典に準じて扱うことが可能である。

なお、本文は、次のものを用いた。

- (影印本) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究（訳文篇）』（東京大学出版会）、説話研究会『冥報記の研究（第一巻）』（勉誠出版）、京都大学附属図書館蔵『孝子伝（船橋本）』、『古代説話集注好選（東寺観智院本）』（東京美術）、後藤昭雄『金剛寺蔵注好選』（和泉書院）、天理図書館善本叢書『日本往生極楽記』、勉誠社文庫『真福寺本将門記』、東辻保和『打聞集の研究と総索引』（清文堂出版）、
- (活字本) 大正新修大蔵経『釈迦譜・三宝感応要略録・弘誓法華伝』、新日本古典文学大系『日本霊異記・三宝絵・宇治拾遺物語・古本説話集・後拾遺和歌集』、日本古典文学全集『俊頼髓脳』、藤井俊博『大日本国法華経験記校本・索引と研究』（和泉書院）
- (13) 本文は、新編日本古典文学全集『万葉集』①、④、⑦（小学館）を用いた。
- (14) 山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（一九三五年、宝文館）
- (15) 拙稿『副詞「イマダ（未）」の用法から見た「水鏡」の文体的性格』（『国文学攷』一七八号、二〇〇三年六月）
- (16) 片寄正義『打聞集と宇治拾遺・今昔物語の関係』（『書誌学』一六巻五号、一九四一年六月）他。
- (17) 宮田裕行『打聞集の漢文訓読語』（『文学論叢』二七号、一九六四年三月）
- (18) 本朝世俗部の中にも〈否定表現〉に偏っている巻（二十五・二十六など）が存在するが、これらの巻には漢文体の出典文献（たとえば『将門記』など）が少なからず含まれていると考えられている。
- (19) 山田孝雄『三宝絵略注』（一九五一年、宝文館）
- (20) 平田俊春『日本古典の成立の研究』（一九五九年、日本書院）
- (21) 注（15）文献参照。
- (22) 注（10）文献参照。

〔付記〕

本稿を成すに際しては、原卓志・佐々木勇向氏より貴重な御助言を賜った。
また、『国文学放』の査読委員の方々より懇切な御意見を賜った。記して感謝
申し上げたい。

—あおき・たけし、徳島文理大学助教授—